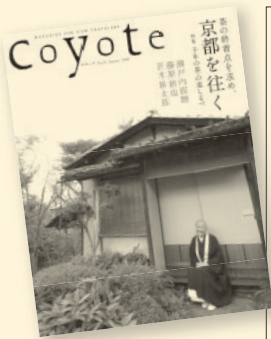




コヨーテ最新号に 書評が掲載されました!



写真絵本のいいところが
全部詰まったような
贅沢な本

= 絶賛発売中 =



どこにいるの
シュヌツフェル?

写真・文 茂木綾子
原作 イルミ・フィドラー
ブックデザイン 服部一成

Books

写真絵本と呼ばれるカテゴリーがある。数は決して多くはないけれど、絵ではなくわざわざ写真で表現するのだから、現実の世界を物語の力で一気に飛びこえる力を持っている名作が多いような気がする。

「手元にあつた写真絵本を眺めていたら、いつか分類できることに気付いた。まずは、ストーリー仕立ての写真作品。有名写真家の隠れた名作や、長野重一の写真に谷川俊太郎がストーリーをつけた「夜のびょういん」など豪華な組み合わせも楽しんだ。今でもコンスタントに発行されているのが学習絵本。自然や科学に関する絵

本や、ハンディキャップのある人の暮らしを伝える本など、未知のもの正しい姿を知るのに、写真はとても有効に作用している。旅行ガイドが絵本仕立てになったような、一こ当地紹介写真絵本もたくさんある。主人公はその町に住む地元っ子なの暗黙のルールで、名前やファクションも当然ローカル仕様だ。最後に忘れてはいけないのが動物もの。動物たちは当たり前のようには言葉をしゃべる。彼らの目線で綴られる絵本は、イラに代表される、動物写真家の存在もあり、写真絵本の一大勢力を形成している。



『The Red Balloon』 Albert Lamorisse
Doubleday Books for Young Readers
\$16.95

もう一つ写真絵本のカテゴリーがあるとしたら、それはパリを舞台にした作品。美しい街からは自然と物語が生まれるようだ。1956年のフランス映画『Le Ballon Rouge』をベースにした写真絵本。人間の心がわかる赤い風船と、男の子の交流が、石版の美しいパリの街並を舞台に展開する。詩的なモノクロ写真の中に現れる、真っ赤な風船を追って、気付けばページをめくっている。



『だれがわたしたちをわかってくれるの』
トーマス・ペリイマン写真と文 ビヤネール 多美子訳 (偕成社/2625円)

偕成社から発行されているシリーズ「障害者を理解する子どもの本」の一作。生まれつき口をきくことができず、体も自由に動かすことの出来ない心身障害児の姉妹、アンナカリンとオーサの日常を写真で語る。二人にとって、なにより大事なのは普通の子どもと友達になつて、一緒に遊ぶこと。相手のことを知る事は、友達への第一歩になることを教えてくれる。

わざわざ写真だけで絵本を作る魅力とは?
人気書店「ユトレヒト」の店主が紐解く
心おどる写真絵本の世界

文と写真=江口宏志
text by Eguchi Hiroshi



どこにいるのシュヌツフェル?

茂木綾子=写真と文 イルミ・フィドラー
=原作 服部一成=英訳 (四月社/1975円)

ある日、ともだちのシュヌツフェルが行方不明になり、こぶたのロジャーが探しにでかけます。とちゅう、ハナという女の子と一緒にになったロジャーは……。女の子とこぶたの胸おどる冒険!



『More, Fewer, Less』 Tana Hoban
Greenwillow \$16.99

2006年に88歳で亡くなるまで、50冊以上の学習絵本を発表した女性写真家、タナ・ホーバン。数や形の概念や考え方を、美しい写真で教えてくれる。本作では、動物やスプーン、野菜や花など日常にあるものを撮った写真によって、多い、少ない、もっと少ない、という数の大小を視覚的に理解できる。子どもを驚かす事何よりも好きだったという彼女の、完成された写真にテキストは必要ない。

江口さんが愛読する写真絵本を3冊